講義ノートから「小牧近江とアンリ・バルビュス」

小田桐　弘　子

はじめに

鎌倉文学館は神奈川県鎌倉市長谷にある。「鎌倉文学館のしおり」をそのまま紹介してみよう。

鎌倉文学館は、鎌倉ゆかりの文学者の著書・原稿・愛用品などの文学資料を収集保存し、展示することを目的として、昭和六十年（一九八五）に開館しました。鎌倉文学館の本館と敷地は、以前、加賀百万石藩主前田利家の系譜である旧前田侯爵家の鎌倉別邸でした。鎌倉別邸は、明治二十三年（一八九〇）頃、第一五代当主前田利嗣氏が土地を手に入れ、和風建築の館を建てたことにはじまります。明治四十三年（一九一〇）、館は類焼により焼失、後に、洋風に再建されます。さらに、第一六代当主前田利為氏が全面改築を行い、昭和十一年（一九三六）、今に残る洋館が完成します。

第二次世界大戦後、デンマーク公使や佐藤栄作元首相が別邸を借り、別荘として使用していたこともあります。また、三島由紀夫は、小説「春の雪」に登場する別荘を鎌倉別邸をモデルに描いています。

昭和五十八年（一九八三）、第一七代当主前田利建氏より鎌倉別邸の建物が鎌倉市に寄贈されます。そして、建物の外観を残しながら補修と増改築を施し、新たに収蔵庫棟を建て、鎌倉文学館として開館しました。

本館の外観は、ハーフティンバーを基調とする洋風と切妻屋根と深い軒出などの和風が混在する独特なデザインです。内部も、全体は洋風でアールデコの様式もみられますが、随所に和風様式が取り入れられています。

鎌倉文学館からは、輝く由比ヶ浜の海、そして空気の澄んだ日には遠く大島まで望めます。また、広大な庭園にあるバラ園では、春（五月上旬〜六月下旬）と秋（十月中旬〜十一月下旬）に、一一〇種・一五〇株の色とりどりのバラを楽しむことができます。

明治から昭和初期にかけて保養地・別荘地として発展した鎌倉の往時を偲ばせる貴重な鎌倉文学館本館は、平成十二年（二〇〇〇）、国の登録有形文化財に登録されています。

少々、長くなったが、鎌倉文学館の歴史や由来について、詳しく明らかに示している。私がはじめて訪れたのは、鎌倉文学館が発足して、まだ二・三年たった頃であった。当時の短大国文科の学生が福岡から、東京の四年生大学への進学の相談のため、夏休みで帰省していた私のところにこられたので、早速鎌倉散歩にでて、発足してさほど時を経てない鎌倉文学館に案内したのであった。

くまなく、中を見学し、バラ園にでた。当時のバラ園はまだ、今日このごろほど、多種多様ではなく、ややさびしげであった。それ故だろうか、広い庭園の隅に置かれた、というか、はめこめれた石碑が私の視野にはいり、近寄ってみた。丁度、前期にテクストとして、用いた作品集のなかの作品にかかわる「種蒔く人」という文字が読み取れ、小牧近江の名前が思い出された。

小牧近江について、関心をもったのは、先に述べた作品集に収めている葉山嘉樹からである。葉山嘉樹の「セメント樽の中の手紙」がたまたまそのテクストに採用されていたことに始まる。プロレタリヤ文学に関してはとくに関心はなかったが、私の研究テーマの横光利一と、新感覚派の集団『文芸時代』の時代をふりかえると、『文芸戦線』にも考えが及んでしまうのは、必然であろうが、さほど深く調べることはなかった。講義の必要上、いささか調べているうちに、小牧近江のクラルテ運動にたどり着いたところであった。そのような時期に、思いがけず、出会ったのが鎌倉文学館の小牧近江の石碑であったのである。鎌倉文学館作成の『鎌倉文学散歩』(資料シリーズ　4)の案内を紹介することとする。

種蒔く人記念碑　文学館のバラ園の東側に、六十センチメートル四方の金属板の碑があります。これはプロレタリア文学運動の先駆的役割を果たした雑誌「種蒔く人」を記念して昭和二十九年に建てられたもので、もとは稲村ガ崎の小牧近江邸内にありました。小牧近江については、後述の稲村ガ崎周辺の項で紹介しますが、この碑は昭和六十年に文学館の敷地に移設されました。[1]

とあり、バラ園の横の片隅に、文学館に訪ずれる人々からも、あまり顧みられず、ひっそりとおかれているが、風雪に耐えたたたずまいは幾度みても、心ひかれるものがあり、『文芸戦線』『文芸時代』に思いをはせる何かがある。

小牧近江にふれる前に、私自身の確認作業として、日本におけるプロレタリヤ文学史からふりかえってみよう。

1

プロレタリア文学研究の諸家の研究を読み進めていきながら、同時代に翻訳されたヨーロッパからの影響も考えていきたい。『日本近代文学大事典』の「プロレタリア文学」の項目において、小田切秀雄は「プロレタリア（労働者、無産者）の文学、という意味であるよりも、それをふくんだところの大正末から昭和初年の社会主義的ないし共産主義的な革命文学の総体をいう。したがって、〔労働文学〕および〔労働者文学〕という概念とは、そのまま重なるものではなく、労働文学はプロレタリア文学以前の時期のもの、労働者文学プロレタリア文学のうちの重要な一部分をなすもの、という関係にあった。[2]（中略）」と定義している。

「プロレタリア文学」以前について、大まかにみていくと、明治の社会主義文学のはじまりは、明治四十三年の幸徳秋水の大逆事件の後の政府の徹底的な弾圧により、社会主義そのものが停滞した。革命的文学運動も当然、いわゆる「冬の時代」、暗い時代を迎えた。しかし、全く、火が消えたわけではなく、第一次大戦後、大正三年から七年ころまで、労働文学として、よみがえり、それがプロレタリア文学運動として発展していった。たとえば、『近代思想』によった、大杉栄や荒畑寒村らは文学的色彩が強いと、されている。個々の作家・作品については、小論では省略する。

一方、大正期の翻訳をみていくと、ロシア文学、しかもやや同時代、十九世紀ロシア文学が昇曙夢・中村白葉・米川正夫らの優れた訳者をえて、大正五年トルストイ叢書、全集は大正八年、一三年、一五年に、ドストエフスキー全集（大正七・一四年）、チェホフ全集（大正八年）、ツルゲーネフ全集（大正六年）等が続出した。白樺派に与えた影響は大きかった。よく知られたエピソードとして、武者小路実篤など、〔ト〕という字があると、初恋の人か、

恋人の名を思いがけず見出したように赤面した、そうである。大正五年にはゴーリキーの「太陽の子、ドストエフスキーの「虐げられし人々」が昇曙夢により、翻訳されている。エレン・ケイの一般平民（今の表現では、一般市民というべきか）、労働者階級の教化の必要性をといた『更新的修養論』、大杉栄が翻訳したロマン・ロランの『民衆芸術論』やホイットマンの民衆詩が白鳥省吾・有島武郎らにより紹介されるなど、大正デモクラシー時代に刺激を与えるヨーロッパ思想が翻訳された。後に、芹沢光治郎は長編自伝小説の中で、ホイットマンの『草の葉』詩集を、原詩で味読する有島ゼミの情況、有島先生と学生たちの風景が読者にも臨場感を持たせてくれるがごとくに描出されていて、興味深い。

前記の小田切秀雄の記述を読み進めると、「日本のプロレタリア文学運動のいとぐちを開いた同人誌『種蒔く人』は、ロシア革命の擁護ということを、その創刊のときからの目標の一つとしていたし、……」[③]としるされている。読んでいくと、葉山嘉樹の『海に生くる人々』は「大正期労働文学の最後を示す記念碑的作品でもあるという面を持っていた」という評価がなされている。続いて、戦中戦後の情況を概観した中で、『種蒔く人』についてもふれて、その後のプロレタリア文学と運動を概観して終えている。

小論では、前記の「小田切解説」の「『種蒔く人』はロシア革命の擁護」とか、「創刊の中心となった小牧近江」の部分に注目しながら、考えてみよう。このような思想をもち、行動をおこした小牧近江については、あまりふれられていないので、考察していく。

2

小牧近江については、『日本近代文学大事典』等の記述を参考にすると、明治二十七年五月十一日（一八九四）に秋田県の現在の土崎市（当時は土崎港）で、生まれて、最後は神奈川県鎌倉市でなくなった。本名近江谷駒（おうみやこまき）である。『日本近代文学大事典』が刊行された昭和五十二年十一月十八日はまだ御存命のため、明治二十七年五月十一日～、と記されているのみである。以下、鎌倉文学館に小牧近江没後、近江谷家から寄贈されたゆかりの文献類から、記することとする。

「社会労働研究」（昭和四十年三月発行）には、「近江谷駒教授略年譜」が付されていて、小牧近江のまだ生前、一九六五年三月、当時の勤務先の法政大学を定年退職する記念として、まとめられたもののようである。この年譜により、小牧近江の生涯の一部をみていく。この年譜はある年は月譜であったり、特記すべき事項のある月は、同じ月が重複していて、興味深い。小論でも、かなり恣意的に、必要と考える事項を筆者により、調べたことや、小牧近江自身の記録などを加筆しながら、列記していく。

一九〇〇年　土崎尋常小学校に入学。のちの『種蒔く人』に加わる金子洋文や今野賢三が同級生にいた。

一九〇六年　小学校卒業までは地元で過ごしたが、当時地元で金融業を営んでいた父親が、衆議院議員になり、東京の暁星中学に進学させられた。なぜ、暁星中学にしたかというと、外交官にしようとして、フランス語をきびしく教える中学だったから選ばれたという。かなりの教育パパであったのであろうか、しかしなぜ英語ではなくフランス語かというのも、興味ある選択であるが、現在の外交官の出身中学・高校は明らかではないが、ある時代まで、暁星出身者が外交官にかなりの数を占めていた

ことも、きいたことがある。しかし、はっきりとした、事実はここでは追求する資料が乏しい。

一九一〇年　三月、暁星中学を四年で退学した。理由として、代議士の父がベルギーのブリュッセルで開催される万国議員会議に出席するため、同行した。

八月、パリ着。

一〇月、パリの国立アンリ四世校に入学。

「アンリ四世校は、九世紀に知られたサント・ジュスヴェーヴ大修道院の敷地に建てられた古い建物で、ルイ大王校とともに知られる由緒ある学校であり、ナポレオン高校と呼ばれたこともあった。古い建物が取りこわされ、昔の面影をのこしているのは、クロヴィス古塔だけだろう。起床ラッパの代りに小太鼓のとどろきで目を覚まし、小太鼓のひびきで消灯した。まだ、軍隊調のところがあった。そのくせラディゲの『肉体の悪魔』を読まれた方はご記憶だろう、あそこから展開する小説である。」（小牧近江「ロマン・ロランの若き弟子たち―ジャンとピエールの二兄弟」から）④

一九一二年　日本からの送金が絶えて、たび重なる学費滞納でアンリ四世校から除籍された。

メリヤス工場経営の仏人に雇われて、働いた。

一九一三年　日本大使館で、いわゆるアルバイトをして暮らした。

一九一四年　十月　国立パリ大学法学部と文学部に入学。この頃からロマン・ロランに心酔した。

一九一八年　六月　国立パリ大学法学部を、卒業した。足掛け八年間の努力がみのったというべきか。リサンシュ・アン・ドロワの称号をうけた。この頃からアンリ・バルビュスのクラルテ団の一員となった。

「クラルテ団」とは後に、小牧近江はバルビュス自身の手になる「グループ・クラルテについて」と

いう一文を「『種蒔く人』とクラルテ運動」に著している。「作家と芸術家たちは、有志の熱望にこたえ、かつは教育者として、また先輩役としての大きな義務から一丸となって、社会的行動を起そうと決意した。（後略）」[5]、というバルビュスの思想に小牧が深く感動したことは、同エッセイの冒頭からも想像できる。

一九一九年　十一月　わたしは恩師でクラルテ運動の盟主アンリ・バルビュスに帰国の挨拶をすると、バルビュスはじっとわたしの顔をみつめ、「帰ったら『クラルテ』を忘れるな」と、固くわたしの手を握りしめた。[6]

同年　十月　ベルサイユ講和会議日本全権団事務嘱託として働く。

十一月、日本大使館のアルバイト的仕事を辞職した。

一九一九年　七月　全権団新聞課「八時間労働日誌」（フランス語）執筆に参加。

十一月　コミンテルンの運動と関係してスイスに行き、同士らと連絡した。レマン湖畔でロマン・ロランと会おうとしたが、果たせなかった。

全権団嘱託を辞任。

一九一九年　十二月　十年ぶりに帰国

一九二〇年　三月　外務省情報部嘱託になった。

一九二一年　二月、第一次『種蒔く人』を、土崎港で、小学校の同級生、金子洋文や今野賢三、近江谷友治、畠山松次郎等と創刊。部数は二百部であった。同年三月第二号に、論文「第三インターナショナルと議会攻略」を掲載して、コミンテルンの存在を、はじめて日本に紹介した、ということである。

一九二一年　四月、『種蒔く人』第一巻第三号発行。これで、第一次『種蒔く人』は停止。
同年　五月　吉江喬松を中心とするフランス同好会がヴェルレーヌ二十五年祭を計画。そこで村松正俊、佐々木孝丸らを知る。
同年　八月　勲六等をうけた。私見では、意外で、当時の叙勲制度は　どのようなものであったのだろうか。
同年　十月　村松、佐々木等とともに、東京で『種蒔く人』を再刊したが、すぐ発禁となった。
小牧は他の雑誌『解放』や『太陽』にまでも、執筆活動を続けた。
一九二二年　一月の『我等』第四巻第一号に、「一九一四年代のフランスの青年とジャン・ド・サンプリ」を掲載した。
同年　六月　『読売新聞』に、「問題のクラルテ運動と僕等の立場」を発表しているのは、興味深い。クラルテ運動の拡がりが想像される。
同年　八月　『種蒔く人』（3―10、11）に、他の評論と、一緒に、「ロマン・ロラン対アンリ・バルビュスの論争―全五通」を掲載。
一九二三年　四月（大正十二年）アンリ・バルビュスの『クラルテ』を、佐々木孝丸と共訳で叢文閣から出版している。
以下、小論に必要な事項を省略を重ねつつ、紹介していく。
一九二四年　四月　第六回国際労働会議政府随員として渡仏する。
同年　八月　フランス共産党機関紙『ユマニテ』に『種蒔き雑記』の要旨を紹介した。

同年　九月　帰国

一九二五年　六月　『クラルテ』創刊号に「仏蘭西に於けるクラルテの人々―クラルテ創刊に際して」を執筆した。

同年　レイモン・ラディゲ『肉体の悪魔』を、波達夫のペンネームで共訳して、アルス社から刊行したが、発禁となる。先のアンリ四世校の思い出につながっている。

『文芸戦線』を舞台に執筆活動を続け、一九二八年には国民新聞記者となり、東京毎日新聞に合併まで約一年間勤務した。一九二九年九月からトルコ大使館に勤めたが、一九三八年（昭和一三年）三月、トルコ大使館を辞職した。翌年の一九三九年仏領印度支那（ママ）に渡り、商社を経て、一九四四年に在ハノイ日本文化会館事務所長になり、民族解放戦士との交遊も多かったが、敗戦の年、一九四五年十一月、収容所に入る。

一九四六年　一月　収容所を合法的に脱出後、小松清とともにフランス人ミソフに協力して、仏越和平交渉の成立に尽力。

同年　五月　引揚げ船で帰国し、秋田に帰るが、執筆活動に専心する。

一九四七年　「鎌倉をよくする会」の一員となり、平和運動に携わる。

一九五〇年　バルビュスの『地獄』を翻訳、蒼樹社から発行した。

一九五一年四月から、中央労働学院、法政大学社会学部教授となる。

鎌倉文学館所蔵の資料に昭和五十三年十月三十日の東京新聞がある。この中に、小牧近江の訃報が二段にわたり、かなりのスペースを割いて、大きな見出しをつけて報じられている。**「プロレタリア文学の草分け小牧近江氏が死去」**

とあり、その生涯を悼み、評論家故小田切秀雄氏も「日本のプロレタリア文学の基礎を築いた人で、現代日本の革新思想と文学の糸口を開いた功績は大きい。また政党にとらわれず権威にも引きずられない自由人として波乱万丈の一生を送った人でもあった。（後略）」と記して、評価している。

東京新聞の訃報記事は小牧近江の最後の仕事として、同年四月『種蒔くひとびと』を出版した、とも報じている。

3

鎌倉文学館に寄贈された資料を、一つずつみていくとすでに引用した「ロマン・ロランの若き弟子たち」など、小牧の僅か十代の留学生活が思い出深く、暖かく、しかも、退学して、自活しなければならなかったことなども、ユーモラスにさえ記されていて、一九一〇年代の異国体験の記録としても、ユニークである。とくに、日本で大学を卒業してからとか、仕事でとか、研究等で、留学した体験談は多いが、小牧のように中学を退学して、パリで小学校に入学して、古典語―ラテン語・ギリシャ語―からはじめた体験をもつ人は皆無ではないかもしれないが、未だ筆者も公刊されたものを読んだことはない。小牧の著わしたロマン・ロランやクラルテ運動に関する事柄には、現実がおこった現場での実際の体験が背景にある。書物による影響・共鳴等を否定するわけではないが、その運動に対して、主体的に関心をもち、行動するには、主導者への信頼がなければ、他の人びとを導くことはできないであろう。小牧が盟主アンリ・バルビュスに対して人間として、敬愛と信頼感を生涯にわたって抱き続けていたことは、小牧の晩年のエッセイ等にもうかがわれる。

数冊の参考文献にあたり、たとえば、『フランス文学史』（河盛好蔵・平岡昇・佐藤朔編著、新潮社、一九六七・

一）などにもあたり、多くを教示していただいた。また、「クラルテ運動」やロマン・ロランと日本近代文学との関係について、『日本近代文学大事典』には「日本近代文学とロマン＝ロラン」の項目もある。先学のロランとバルビュス研究について、多くの示唆をいただいたが、小論では感受性の鋭い青年期に、生きる学問として、人生の指標として、たちあった、小牧近江自身の筆に拠って、考察していこう。

アンリ・バルビュス（Henri Barbusse 1873—1935）の『クラルテ』は、先の年表に明記されているように、一九二三年に小牧近江は佐々木孝丸と共訳して、叢文閣から出版している。この扉にアンリ・バルビュスは「衷心衷情よりの共感を以て」[7]という真情あふるるメッセージを贈り、励ましている。小牧がアンリ・バルビュスについて記した一文には、他の研究者には到底記すことは、できないものがある。小牧近江の文章にふれることは昨今、余り多くないとおもわれるので、少々長いが全文をここに紹介したい。

テクストを紹介する際に、たとえば、小牧の紹介文の後半部に解説している『砲火』について、私が説明すると次のようなものになる。すなわち、バルビュスはなまなましい体験をもとにして書かれた戦争小説の傑作『砲火』*Le Feu*（1916）を発表した。これは「塹壕生活の恐怖にみちた日々のエピソードを、露わなレアリスムの手法で記録した歩兵分隊の『日誌』である。作者は戦争の矛盾とばかばかしさを烈しく攻撃している」というふうに、なるのであるが、小牧の文体には、血が通っているというのか、読者に強く訴えてくるものが流れていて、当時の日本の若者が遠いヨーロッパの出来事を、あたかも臨場しているように現実を読み取り、共感しただろう、と思える。

バルビュスの人と作品

（初出は『出版ニュース』からで、本稿では『種蒔くひとびと』（一九七八）に拠った。）[8]

アンリ・バルビュスはアナトル・フランス、ロマン・ロランとともに現代フランス文学を飾る作家であり、思想家である。年齢順からいうと、三人の中での後輩である。彼は一八七三年生れだから、今生きているとすれば、来年八十歳になるわけだ。

ともに文学者であり、思想家でありながら、バルビュスは行動の面で、より積極的であった。彼はその行動を街頭にまで進出させた。フランス共産党はその創立後幾年も経たないうちに大弾圧に遭ったが、そのときバルビュスは一文士の身で、率先して入党した。（小牧・後藤共訳『知識人に与う』ダヴィッド社版参照）

じらい彼はペンを武器とし、辯論をタテとして反戦主義のため、反ファシズム運動のため身を挺して闘った。バルカンの白色恐怖やインド民族解放のためアピール、また日支事変に際しては帝国主義戦争のための軍需品積出し阻止運動とか、その現われである。そして、彼は世界的ファシズムの旋風のさなか、一九三五年八月三十日、その苦難の生涯をモスクワで閉じた。

このように波らんに富んだバルビュスの晩年であった。けれども彼は一足飛びに思想の旗手になったのではない。悩み、悶え、自らの信念で破ることによって、彼はこのような境地に達したのだ。

アンリ・バルビュスは一個の平凡な作家であった。詩的天分に恵まれた彼は、多くの作家がそうであったように、詩人として文壇にデビューした。若き日の詩集『哭く女たち』（一八九五年）『哀願する人びと』（一九〇三年）は初期に属する。すでに十八歳でロマンティシズムの申し子だったこの年少詩人はやがて象徴主義的傾向にかわったが、とどのつまりはボードレールの「悪の華」に影響されるところが多かった。バルビュスの全作品に漂っている詩的リズムはこの作家は根からの詩人であることを物語るものであろう。『地獄』（一九〇八年）はその作風からいって、詩人バルビュスの独自の手法を示しているものであろう。何びとも感じるだろう

ところは、レアリズムと象徴主義的なもののなかに、もつさりとした《陰影》がボカされているところだ。これはカリエールの画風を文学のなかに《移植》したもので、これによって彼は自らの表現方法を編み出した。

内容は下宿屋の壁穴を通じてみた人間の赤裸々な姿—愛・肉慾・死・信仰—しかも淫らでないありのままの姿であるといえば、それまでだが、少しでも具眼の士ならここに個人主義的絶望のなかにあつて、苦悩する作家バルビュスの姿を見逃がさぬだろう。ここで作者はいつている。「このどん底から光を求める叫び、この隠された真実を求める努力……そして、人間性に悩むこの私は、その高らかな響を耳にするのだ。」（拙著『地獄』蒼樹社版）それは、光を求めつつも闇に生きる作者自身の姿なのだ。そして、それがいかに展開するだろうか。

一九一四年、第一次世界大戦が勃発すると、病弱なバルビュスは自ら銃を取つてこれに参加した。ここでバルビュスは自ら砲火の洗礼をうけることによつて、戦争という抜きさしならぬ真理の鏡の前に突きあたる。一九一六年のゴンクール賞を獲得することになつた『砲火』はその副題にもあるように、「ある分隊の日記」である。ここで、作者は「黒雲の二つの塊のあいだから、一條のしずかな光がさしてくる。その光の線はおも苦しい感じが するほど、せまくて喪の色のような色で、あわれではあるが、それでもやはり、太陽は存在することの證明をもたらす。」（新村猛・後藤達夫共訳『砲火』ダヴィッド社版）と結んでいる。それは次にくる一條のしずかな光であるところの『クラルテ』の預言なのだ。

バルビュスは「太陽は存在することの證明」にあたつて、『クラルテ』の主人公としてある工場のありふれた一事務員を掠し来つた。シモン・ポオランは一日の勤めをきちんと果すことのみをもつて能事とした。世の中に貧富のあるのは当然のことで、それをとやかくいう者は国家社会にとつて有害な存在だと思うそんな人間だつた。祖国のためという戦争に勇躍出征する。さまざまな体験と、打ち続く幻滅のうちに懐疑に捉われる。彼

は負傷して戦場から送り返えされるが、一夜、明け放された窓際に頬杖をついて思いにふけつているうち、大気がすでに目覚めかけている

彼の良心に暗示を与える。夜は暗く、人びとは光を、すなわち、クラルテを求めている。たれもなぜ夜は暗いかを知つている。ただ目を開けさえすればいいのだ。光は萬人のものなのだから。彼は翻然と悟る。無秩序なものを秩序あるものにするのが、破壊されている社会を清めることが革命の真理だ、というのが『クラルテ』のテーマである。『地獄』、『砲火』『クラルテ』は一平凡な作家の思想的進化を物語る意味で、一連の長篇をなすものである。はじめから意図して書かれた三部作ではない。

やがて、バルビュスたちの提唱によつて、『クラルテ』実践運動である思想家と芸術家たちの世界的結合が確立したが、反戦運動と知識人のインターナショナルな精神がその魂である。大正末期におけるわが国のプロレタリア文学運動に大きな影響を與えたことはひとの知るところである。

バルビュスは一生を通じて誤まれる伝統精神と、歪められたキリスト教思想と対決し、暴虐なファシズムと抗争した。敗戦フランスの輝かしいレジスタンス運動はここにも芽生えているといえよう。

【こまき・おうみし氏は仏文学者】

この頁の右頭にアンリ・バルビュスの写真が付されている。あまり見かけないものなので、小牧近江自身が所蔵していた写真であろう。全文を通して、小牧近江のバルビュスに対する熱い、他人事ではない、共感のこもった思いが伝わってくる。

終わりに

小牧が前文の終わりに述べているように、日本プロレタリア文学の真の目覚めはクラルテ運動からの発展であったのである。このような背景のもとに、『文芸戦線』に展開したのである。一方、やはりヨーロッパのモダニズム思潮の刺激のもとに『文芸時代』も横光利一を中心にスタートしたのであるが、『文芸時代』の傾向はクラルテ運動の主旨とは、違っていることは明らかである。時期的には、少々『文芸戦線』の方がはやかったのである。この後、日本プロレタリア文学は盛んになり、横光利一ら『文芸時代』同人には、プロレタリア文学でなければ、世もあけないと思うほど、脅威ですらあった、という。横光にもプロレタリア文学を意識した作品「静かなる羅列」（大正十四年七月）があるが、大川の流れの変化を歴史的におうこの作品は、プロレタリア文学と銘打ったプロレタリア作家の作品以上に、自然と人間、人々の生活の変化などを、クールに見つめていて社会性に富むものといえよう。この作品の巧拙はさておき、横光たち芸術派を囲む、この時代の空気をよく物語っている。横光利一が力説し、度々繰り返す「マルキシズムとの格闘時代」とか、プロレタリア文学との「格闘」というのは、彼にとって、本音であったろう。昭和三年から六年にかけてかかれた『上海』はプロレタリア文学に対する挑戦意識から生まれたとも、横光利一自身は後にいっているのである。

私見を述べると、当時のプロレタリア文学作品で、『上海』ほど、資本主義経済・経済上の国際関係・植民地主義等々の、現代の世界情況に通じる世界を描いたものはない。この意味において、当時のプロレタリア文学は国内の閉鎖的情況や、情念、自己告白的私小説風、はてや怨念を示唆するような感情に、多くの視点・力点がおかれている、と読めるものもある。小牧がバルビュスから託され、小牧自身の決意のもとにはじめたクラルテ運動の理想か

ら、変容していった作品が多々みられる。

そのような中で、独り、文壇ではまだ無名であったが、大正十三年四月に小樽高商を卒業して、銀行勤めをしていた、小林多喜二は学生時代の仲間と同人誌を発行した。その名称は『クラルテ』である。このことは、ヨーロッパにおいて、小牧近江が実際に目でみ、体験した、後日日本に身をもって灯したクラルテ運動がいかに、多くの青年たちに刺激となったかを表しているといえよう。小林多喜二は学生の頃からアンリ・バルビュスを翻訳した。パリ発の“Clarete”（光）→『種蒔く人』→日本の一地方同人誌『クラルテ』と、ヒュマニズム精神に基づく、世界の人類の解放と世界平和を希求したプロレタリア文学の曙は、アンリ・バルビュスと、小牧近江を媒体として細いけれども、根強く、受け継ぐ芽ばえとなったことを記して、小論を終えよう。

註

① 『鎌倉文学散歩』編集 鎌倉文学館 鎌倉市教育委員会 平成十一年三月 一一六頁
② 『日本近代文学大事典』第四巻 日本近代文学会編 講談社 昭和五十一年十二月 四五一頁
③ 前掲書② 四五一～四五二頁
④ 『種蒔くひとびと』かまくら春秋社 一九七八年、四十頁 初出不詳
⑤ 前掲書④十頁
⑥ ⑤に同じ
⑦ アンリ・バルビュス『クラルテ』小牧近江・佐々木孝丸共訳 叢文閣 一九二三年三月 扉頁
⑧ 前掲書④ 七～八頁

補記

鎌倉文学館には小牧近江没後、近江谷家から寄贈された関連資料がかなり、収められている。本論ではふれなかったが、ポール・クローデルとかかわる資料もある。中でも、クローデル自身の手によって色紙にかかれた詩文には、心魅かれた。昭和三十二年十一月付けの山内義雄からの「舌代」とともに保存されている。それによると、「クローデル滞日の作にかかる〈江戸城内濠をめぐりて〉中の自筆詩稿」とある。親しい関係者に山内義雄が贈呈した。その後一九六三年八月六日付けの日本クローデル協会日本側代表　山内義雄、フランス側代表　オーギュスト・アングレースからの執筆依頼書もある。「ポール・クローデル手帖《クローデルと日本》」(Cahiers Paul Claudel,projet d'un numéro consacré à "Paul Claudel et Japon"と題したものである。仏文による資料には、Ōmi Komakino の名前も、山内義雄、渡邊守章氏等とともに、COMITE DE REDACTION に加わっている。芳賀徹氏や高階秀爾氏も執筆者に加わっていて、興味深いリストである。小牧近江の資料には多くの熟読したいと思うものがあり、いつかときを得て、丁寧に手にとり、調査することを願っている。

本論をまとめるにあたり、鎌倉文学館小田島一弘氏に大変、親切にご協力いただいたことを、記して深く感謝もうしあげたい。